

# ONE ART Taipei 2025 藝術台北

## 執行会長・王瑞棋 ワンズイチ インタビュー

1月10日から12日にかけて、7回目となったONE ART Taipei 2025 藝術台北（以下…OAT25）がホテルメトロポリタンプレミア台北（J.R.東日本大飯店台北）で開催された。日本や韓国、香港、マレーシア、フランスなどから61軒のギャラリーが出展し、うち21軒のギャラリーが初出展。日本からは11軒が参加した。同フェアの執行会長である王瑞棋（也趣藝廊 AKI Galleryのオーナー）にインタビューを行った。



右から「ONE ART Taipei 2025 藝術台北」理事・劉忠河、執行会長・王瑞棋、理事・陳世彬

——5月には新しいイベントも準備されているそうですね。

OAT25は、1月12日に終了しましたが、5月には「Voices」および「Photo One」の2つのイベントを開催します。アジア太平洋地域の現代アート市場の発展をさらに促進するため、「Voices」は昨年の会場だった南港の「瓶蓋工場台北製造所」から市中心の「華山1914文化創意園區」へ移し、規模を拡大します。また、台北当代アートフェアと同時開催し、各アーティストに100平方メートルの展示スペースを提供、絵画やメディアアート、彫刻にとどまらず、多様な展示形式を取り入れます。さらに、より学術的な展覧会「Photo One」も新たに立ち上げます。より多くの関心を集め認知度を高めることを目指し、世界中のアーティストと専門家に交流と発展のためのプラットフォームを提供します。

——近年のアート市場にはどのような変化がありますか？

私たちは特にデジタルマーケティングを重視しており、オンラインプラットフォームを強化するため、さまざまなメディアアートを活用しながら、より多くの新しいギャラリー

を呼び寄せ、市場の変化に対応しています。

台湾のアート市場は日本や韓国、香港など東アジアの他の地域と似た状況にあります。台湾の半導体産業が世界経済で強い存在感を示していることから、台湾のアート市場は比較的安定していると思います。その堅実な経済基盤により、台湾はアジア太平洋地域のアート市場で優位な地位を占めています。それを反映するように新しいギャラリーが出現し、多くの若いアートコレクターや起業家が市場の潜在的な可能性を求めて、積極的に参入しています。コロナ禍の間はギャラリークターアートやフィギュアアートが一時的に流行しましたが、市場が徐々に落ち着きを取り戻す中で、アート作品の表現形式も変化しています。単に可愛さに依存せず、技法や素材、表現方法が深化しています。例えば、今年OAT25の「35歳以下新人賞」を唯一受賞した彭思錡は、落ち葉を創作のインスピレーションとし、細やかな質感の処理を通じて、日常的な落ち葉を全く新しい芸術の次元に引き上げています。このような視覚体験は、従来のアート鑑賞の枠を超えたものです。

——なぜ台湾市場は日本のアーティストに注目しているのでしょうか？

作品の専門性や精緻さ、独自の色彩感覚に加え、日本のギャラリーが長年にわたり台湾市場に深く関わってきたからです。多くの日本のギャラリーが台湾のア



OAT25「35歳以下新人賞」：彭思錡「輪廓—玩物XVI」2024年 セラミック、生漆 24.5×17.0×4.0cm ©AKI Gallery

ートシーンと積極的に交流し、コレクターのニーズを理解しながら協力を推進してきました。また、台湾の若い世代は日本のアニメ文化の影響を強く受けているので、日本のアート作品は親しみやすいものになっています。

私はギャラリー経営においては、国や地域にとらわれず、アートそのものの本質的な価値を重視し、個人的な好みに基づいて活動しています。また、アーティストを自分のギャラリーに所属させて専有するのではなく、他のギャラリーと協力することで、意見交換やリソースの共有を図り、多くの優れたアーティストと接点を持つよう努めています。台湾のアートの国際的視野を広げ、新たな露出の機会を生み出すことによって、アート業界が共存共栄するエコシステムの理念が実践されるのだと思います。